
[JJ] Eveningポスター発表 | セッション記号 S (固体地球科学) | S-CG 固体地球科学複合領域・一般

[S-CG61]海洋底地球科学

コンビナー: 沖野 郷子(東京大学大気海洋研究所)

2018年5月23日(水) 17:15 ~ 18:30 ポスター会場 (幕張メッセ国際展示場 7ホール)

海洋底は現在の地球上において最も活動的な場所です。海洋底で起こるさまざまな地学現象はプレートテクトニクスのみならず地球深部の構造やダイナミクス、さらに地球表層環境と密接な関わりがあります。また、海洋底には過去の環境変動の歴史や物質循環の記録が残されています。本セッションでは、「海洋底」というキーワードを含む研究成果の発表を海嶺系・沈み込み帯・ホットスポットなど地域によらず、地球物理学的・地球化学的・地質学的など研究分野によらず、観測的・実験的・理論的・技術開発的など研究手法によらず、幅広く歓迎します。多様な研究者が集い議論できる場として、新しい海洋底像を描き出すことを目標とします。共同コンビナー: 田所敬一(名古屋大)、石塚治(産総研)、土岐知弘(琉球大)、高橋成実(JAMSTEC)

[SCG61-P03]DSDP Leg 58 Site442~444, ODP Leg 131 Site 808から掘削された四国海盆基盤岩の再分析と、分析値の特徴

*原口 悟¹、藤永 公一郎²、中村 謙太郎³、山口 飛鳥⁴、石井 輝秋⁵ (1.海洋研究開発機構、2.千葉工業大学次世代海洋資源センター、3.東京大学工学部、4.東京大学大気海洋研究所、5.静岡大学防災総合センター)

キーワード: 四国海盆、背弧海盆玄武岩、化学分析、アーカイブサンプル

DSDP, ODPによる四国海盆基盤岩の回収は、四国海盆中央部の Leg 58 Site 442~444と、南海トラフ沈み込み帯の Leg 131 Site 808で行われている。これらの基盤岩の化学分析値は、DSDPおよびODPの報告書で報告されているが、Leg 58は1980年頃、Leg 131は1990年頃の分析である。このため、当時の分析手法の技術的制約から、特に微量元素の10ppm以下の低濃度の部分で精度が低く、現在の最新の分析手法による分析値と比較するには問題が多い。特に「元素比」を比較する場合、元素濃度の有効桁数が低いことから、有意な値が得られないことがある。2016年合同大会では、IODP Exp. 333 Site C0012で得られた四国海盆基盤岩に観察された変質作用を考察したが、比較対象として、Site 442~444, 808の基盤岩を用いている。この際、化学分析データが、DSDP, ODPの報告書以降、新たな分析の報告がなく、データが上記のような問題を含んでいたため、テキサスA&M大学に保管されているアーカイブサンプルを入手し、Exp. 333のサンプルと同じ分析手法で再分析を行った。本報告では、再分析されたデータが示す四国海盆基盤岩の化学的特徴、および再分析の「意義」について報告したい。